

## 第14話 源氏の拳兵

頼政は宇治の一戦に脆くも敗れて自殺したが、以仁王の令旨を奉じて諸国の源氏が一齐に起こる。とりわけ鎌倉を根拠地とした頼朝の勢いが最も振るう。清盛の焦燥。遷都の中止。

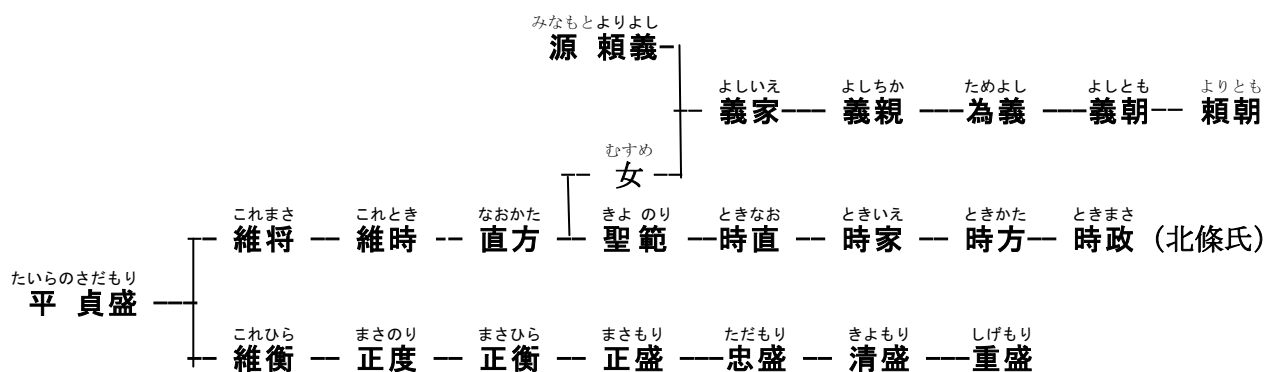
### 伊豆の頼朝

さて、以仁王を奉じて起こった源頼政は宇治の戦いに敗れて死んだが、その志は決して無駄にはならなかった。王の使いに立った源行家から令旨を觸れ示された諸国の源氏は、殆ど一齐に奮い起こって平氏の討伐に向った。その中でも殊に最も有力であったのは、伊豆から起こった源頼朝です。平治の乱の時に、彼が14才で伊豆の蛭が島に流された事は既に述べた。その時から20年、今年も34才になるまで彼は淋しく流人の生活を送っていたが、余程辛抱強い人であったと見えて、その長い年月の間、仮にも平家の目を惹くようなことは避けてしなかったといえます。

しかし、源氏の嫡流に生まれた身なのですから、心の底では、いつかは源氏再興の旗を翻そうとは思っていたのでしょう。ただ平家の威勢がいかにも盛んなので、身を慎んでその機会を待っていたのでしょう。王の令旨を受けると大いに喜び、密かにこれを妻の父の北條時政に示して兵を起こす相談を始めました。

### 源氏と北条氏との関係

ここで、ちょっと置いて置きたいことは、源氏と北条氏との関係です。



そもそも北条氏は、その祖先は平貞盛から出て、清盛らの伊勢平氏と同じ系統に属している立派な家柄であると共に、貞盛の曾孫にあたる直方の女が、源頼義に嫁して義家を生んで以来、源氏ともまた深い関係が出来ていた。時政は直方からは6代の孫で、その頃、伊豆の狩野川の平野に勢いを張っていた。それで平家は、頼朝をこの地に流す時に、特に彼と東海岸の伊東祐親とに命じて監視させたのですが、祐親が事毎に厳しくしたのに反して、時政は私かに頼朝の人物を見込んで、娘の政子とその妻にしていたのです。

### 八牧の夜討ち



より源氏の家来でしたが、彼の時代に平家の重い恩を受けて、今もその厚い信任を受けている関係から平家のために働こうとしたのです。



伊豆 ふしき うろ 臥木の空洞に危うく命を助かる よりとも 頼朝

いしほしやま  
石橋山の戦い

さて かげちか 景親は、弟の またの ごろうかげひさ 俣野五郎景尚を始め相模、武蔵の せいへい 精兵3,000騎を率いて石橋山に向い、 よりとも 頼朝の軍の前に出て陣取った。ところが、両軍がまだ戦いを開かぬうちに、既に日が暮れかけた。合戦は明日の事だという者などもいたが、 かげちか 景親は「明日にでもなれば、敵には大勢の加勢がついて、容易に攻め落とすことが出来なくなろう。今夜のうちに攻め落とそう」と谷を越えて急に攻めかかった。 かげちか 景親の先陣は また 俣野 の かげひさ 景尚、 よりとも 頼朝の先陣は さなだの よいちよしただ 佐奈田與一義忠でした。 お 折りから日が暮れると、雨が降り出し、次第に大降りになって、風さえも加わった。



ふしき うろ よりとも  
臥木の空洞の頼朝

両軍の勇士は、その夜の暗い風雨の中を入り乱れて大いに戦ったが、いかんせん頼朝よりともの軍は敵の十分の一という小勢ですから、先陣の佐奈田與一さなだのよいち かげひさが景尚かげひさに討たれた後は、次第に敵の大軍あつぱくに圧迫されて、24日の明け方あ がたには、ついに全く負けて、ちりじりに土肥（訳注：石橋山から 5km 位南の湯河原辺りであり、伊豆半島西海岸の土肥ではない）の方へ落ちて行った。

しかも、敵の追撃があまりにも急であったために、頼朝よりともは逃げ切れなくて、杉山の奥に分け入り、2,3 人の家来と一緒に大きな臥木ふしき うろの空洞かくに入って隠れていた。

景親かげちかは 3,000 余騎の先きに立って、ひしひしと跡を追ってここまで来ると、頼朝よりともの姿が掻き消すように見えなくなってしまったので、さてこそこの臥木ふしきの中あやを怪しく思い、自分はその上ゆんづえに登って弓杖を突いて踏みまたがりながら、その中を捜すようにと部下に命じた。

かじわらかげとき  
梶原景時

この時、景親かげちかの従弟の梶原景時かじわらかげときが進み出て、弓を脇わきに挟み、太刀に手をかけながら臥木はさの中へ、つと入ると、彼はびたりと頼朝よりともと真向かいになって、互いに眼と眼を見合わせた。頼朝よりともは今よりともはこれまでと覚悟を決めて、景時かげときの手にかかるよりはいつそ自殺しようと、腰の刀かげときに手をかけた。と、景時かげときは、かねてから私ひそかに心を頼朝よりともに寄せていたので、小声で、「お待ちなさいませ。 お助け申します」といって、手早く、そこらの蜘蛛くもの巣すを弓の端うろや冑の鉢うろにつけて空洞うろの外こうもりに出ると、「この中には何にもいない、蝙蝠こうもりが飛んでいるばかりだ」といって、景親かげちかの注意よそを余所よそへ向けさせようとした。

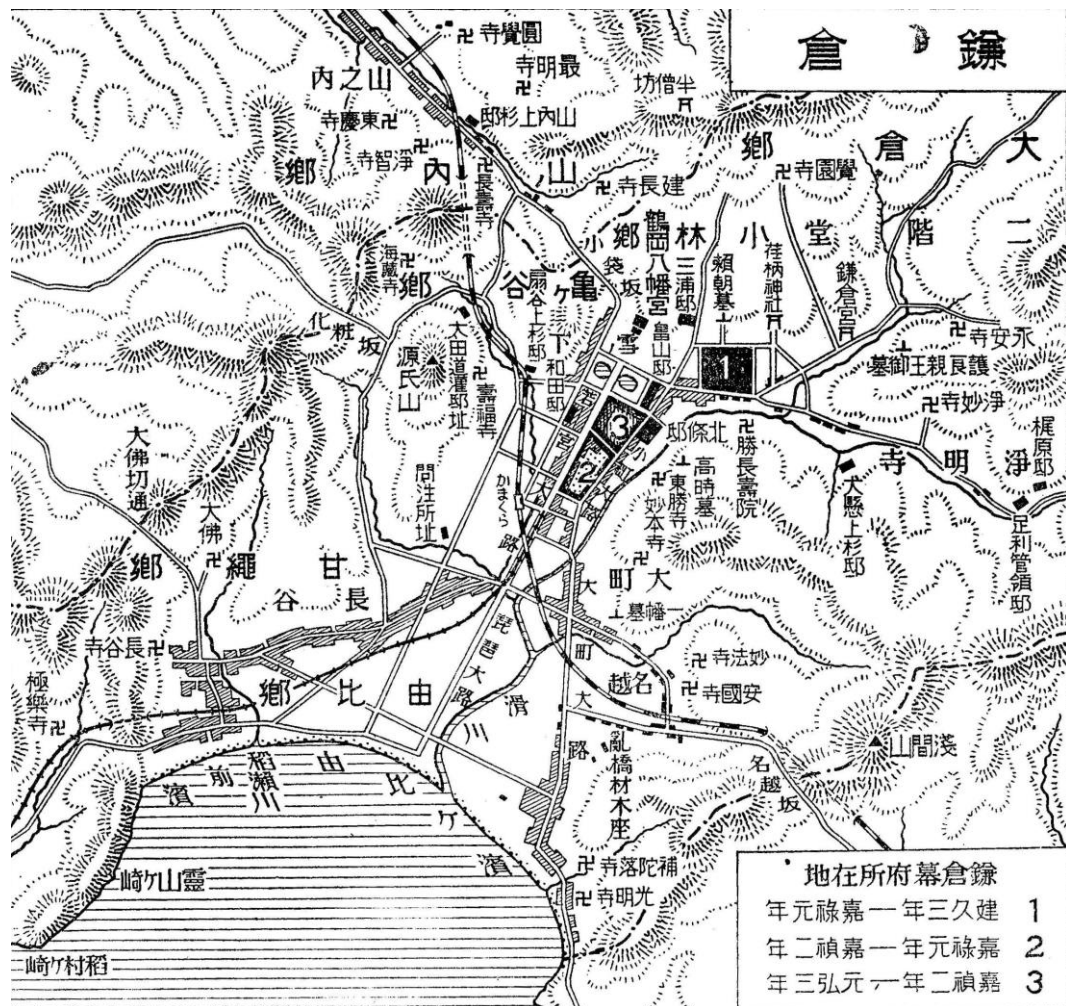
景親かげちかはなおも怪しく思っ、臥木あやの上から弓ふしきを中さぐに入れて 2,3 度さぐからりからりと探ってみた。と、空洞うろの中から山鳩やまばとが 2 羽はばた飛び出して、はたはたと羽搏はばたきするので、さすがの景親かげちかも漸ようやく疑うたがいを晴らしてその場はを立ち去った。 実際、ここで頼朝よりともが危あやうく命いのちを助かったのは、勿論かげとき、景時かげのお蔭かげでもあるが、一つは彼の運てんうんが強ほかかった為で、全く天運てんうんと見る外ほかはないのです。

よりとも さいきよ  
頼朝の再挙

頼朝よりともは辛からくも虎口ここうをのがれて臥木ふしきの空洞うろを出ると、ひそかに海岸まなづるさきに出て、相模まなづるさきの真鶴崎まなづるさきから小船まなづるさきに乗って安房あわ（千葉県最南部）に逃のがれたが、さきに石橋山ほうじょうときまさの戦いで別れ別れになった北條時政ほうじょうときまさを始め、部下の主なる者も次第こうずいに集まって来た上に、石橋山さかわがわの戦いには、洪水こうずいのために酒匂川さかわがわまで来て間に合わなかつた三浦半島みうらの三浦みうらの一族あともまた、跡したを慕たづって尋たづねて来たので、俄にわかに勢にわいがまた良にわくなった。

よりとも  
 頼朝は先づ安房の一国を平定すると、使いを諸方に出して身方を募った。上総には上総介広常かつさきのすけひろつねがおり、下総には千葉介常胤ちばのすけつねがいたが、いづれも祖先から源氏代々の恩顧を受けた者共ですから、それぞれ大軍を率いて身方についた。

すみだがわ  
 隅田川を渡ってむさし  
 武蔵の国に入る頃は、よりとも  
 は、頼朝の軍勢は既に30,000騎に達してい



さら としま たきのがわ  
 たが、更に豊島の滝野川に陣を取った時には十万余騎となり、その後、はたけやましげただ  
 畠山重忠を始め、石橋山では敵方となって戦った武蔵、ぞくぞく こうさん  
 相模の武士共の続々と降参して来たのを併せて、10月6日に、かまくら  
 相模の鎌倉に入った時には既に十何万騎という大軍になっていた。

こんきよち さだ かまくら  
**根拠地と定めた鎌倉**

鎌倉は東西南北の三方に山を繞らし、南は海に臨んで、守るに易く、攻めるに難い要害の地であるのみならず、よりとも  
 頼朝の6代の祖である頼義よりよしが相模守となってこの国に下って以来、源氏に取っては縁故の深い土地でした。前九年の役に、よりよし あべのさだとう  
 頼義が安倍貞任を誅して、めでたく凱旋した時にこの地に八幡宮を建てて  
 しんおん  
 神恩を謝したことは前に述べた。その子の義家もまた当国の守となって、この社に修復を加えて崇め  
 まつ じらい るいだい よりとも よしとも かめがやつ やかた  
 祀った。爾来、鎌倉は源氏累代の領地となり、頼朝の父の義朝も、この地の亀谷に館を構えて東国に勢いを振るったのでした。よりとも かね  
 頼朝も、予て鎌倉を根拠地と定めていたので、今度ここに入ると、数日の間は軍馬を休めて、将来の為の準備と計画をしていました。

ところが、いくにち  
 幾日も経たないうちに、平家の大軍がよりとも ちよく ほう  
 頼朝追討の勅を奉じて駿河の手越に到着したとい  
 ちゅうしん  
 う注進が来た。それで、よりとも  
 頼朝は直ぐに鎌倉を出発して、あしがら  
 足柄を越えて駿河に入り、軍を富士川の東岸に進めた。したが  
 従う兵は200,000騎を越えていた。

ふじがわ たいじん  
**富士川の対陣**

一方、福原の平家では、おおば さぶろうかげちか もと はやうま よりとも むほん し  
 九月の初めに大庭三郎景親の許から、早馬で、頼朝の謀反の知らせがあった

## 第14話 源氏の挙兵

が、石橋山の一戦で身方が大勝利を得たと聞いて、清盛を始め一同大いに喜んでいて、程なく、また早馬が次から次へと駆けつけて、頼朝の勢いが更に大いに盛んになって、東国は殆ど全部がその指図に従うようになったと知らせて来た。清盛は大いに驚いた、「こういう事があるから、平治の軍の時に頼朝を斬ってしまえといったのに、いまいまいしい事をした」と怒って見たが今は追付かない。頼朝に勢いのつかないうちに早く叩きつぶしてしまえと、乃ち嫡孫維盛を大将として、弟の忠度を副将として、兵五万を率いて東国に向かわせた。

けれども、平家の軍は悠々と日数を重ねて、東海道を下って来たので、やっと富士川の西岸に着いた時には、既に源氏の軍がその東岸に充ち満ちていた。平家は50,000、源氏は200,000とその兵の数からいっても四分の一にしかならないのに、東国の武士の強いということは予ねて噂にも聞いていたので、大将の維盛を始め、誰も皆、戦わない先から、胆を冷やしてびくびくしていた。

### 水鳥の羽音

治承4年10月23日、源氏方ではいよいよ明日は総攻撃をしようというので、その夜は内々に用意をしていたが、中でも先陣であった甲斐の武田信義らは、その夜のうちに部下の20,000の兵を敵陣の後ろにまわして置こうと、間道を進んで行くと、富士沼におりている無数の水鳥がその物音に驚いて一時にぱっと飛び立った。かねて怖気についていた平家の兵らは、その夥しい羽音に胆を潰して、「それ夜討ちだ！」と騒ぎたてると、大将の維盛を始めとして、50,000の兵が皆、取る物も取りあえず、鎧も冑も忘れ、弓も箆も取り落として、況して道具や馬の鞍などは、何もかも打ち捨て置いて、われ先にと逃げ出した。

そんな事とも知らずに、源氏は24日の朝になると、轡を揃えて、岸に立って、天にも響け、大地もゆらげとばかりに鬨を3度作ったが、平家の陣では音もしない。どうした事かと怪しみながら、人を見て見させると、鎧や、弓や、忘れ物こそ夥しく残っているが、人は一人もいないのです。若しや都で源氏の身方が兵を起こしでもしたために、急に引き上げたのではあるまいかなどと言っていたが、土地の女が一人いたのに聞くと、平家の兵は夜中に大騒ぎをして、あわてて退却したが、その時は水鳥の羽音が夥しくしていたと言ったので、源氏の兵は、始めてその訳を知って大いに笑った。

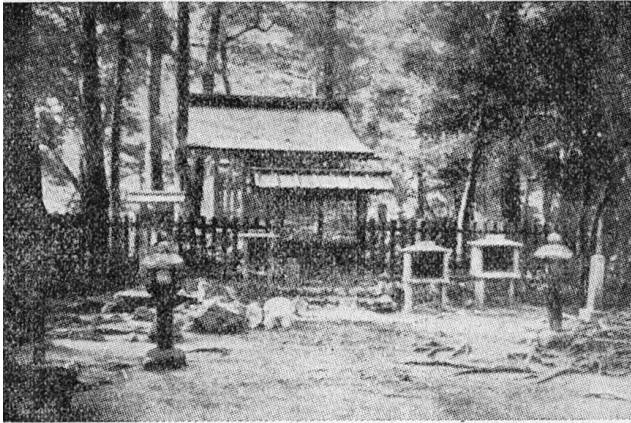
頼朝はこれを聞くと、直ぐに平家の跡を追って都に攻上ろうとしたが、この時、有力な部下の者らが、「東国にはまだ平家に心を寄せている者がいますから、それをすっかり無くして都へ上った方がよいでしょう」と諫めたので、成程とその議に従い、兵を鎌倉に返すこととなって、その日は黄瀬川の宿まで引き返した。

### 義経の来会

この時、年の頃は20歳余りで、色の白い、背の小さな、しかし顔付や目付の際立って人にすぐれた男が、20余騎の家来を連れて頼朝の陣の前に出て来て名乗った。「自分は義朝の子の牛若といった者で、今は九郎冠者義経とっている。今度、兄上が平家追討の義兵をお挙げになったと聞いて、急いで奥州から

馳せ参ったのだ。 そう申してくれ」と。

だが、一体、牛若はその後どうして坊さんにならずに、奥州なぞへ行っていたのか？



京都 鞍馬寺魔王堂

(義経が深夜に人目を忍んで剣術を稽古したところ  
と伝えられている)

よしつね お た  
義経の生立ち

ここで一つ義経の生立ちを語って置こう。

さきに平治の乱の時に、牛若は兄の今若、乙若と共に  
命を助けられて、坊さんにならされることになったこ  
とは前に述べた。 その時、彼はまだ生まれたばかりで、  
母の常磐の懐にいだかれていたから、なお暫くは母  
の許に留めておいたが、4才になると、京都の東の山科  
という所に預けられて、そこで7才になると、いよいよ

坊さんになるために鞍馬山の寺にやられた。 彼は経を読み、学問を励んでいた。

くらまでら しやなおう  
鞍馬寺の遮那王

11才の時に、ある日、諸家の系図を見ているうちに、自分が義朝の子であることを知ると、坊主になる気は全くなり、いつかは平家を滅ぼして源氏を再興しようと固く決心した。 その後の牛若は、寺にいても、小僧の心はまったくなかった。 昼はいよいよ学問を励むが、夜は鞍馬の山の奥で、人目を忍んで一心に剣術を稽古した。 寺の和尚はこれを知って驚いて、早く髪を剃るようにと勧めたが、牛若は決してうんと言わない。 さらに厳しい坊に移して、名をば遮那王と改め、武士をなることを思い止まらせようと図ったが、「2人の兄が出家したのをさえ残念に思っているのん、無理に勧めると突き殺すぞ！」とて相変わらず学問と武芸の練習ばかりを続けていた。

きんしょうにん きちじ  
金商人の吉次

こうして16才になるまで稽古を続けて、腕も相当に出来た時に、ある日、彼は奥州の金商人の吉次に逢った。 吉次は奥州の藤原秀衡の邸に出入りしている者で、京都に上る毎に必ず鞍馬寺に参詣することにしていたので、牛若は既に以前から知合いになっていたのです。 彼は吉次にいった。「自分を奥州に連れて行ってくれ。 むこうに行けば立派な人を知っているから、お礼にはお金を貰ってやる」と。 で、吉次が、後で和尚さんに叱られると困るといって、「寺では自分を持て余しているのだから、連れ出しでも決して苦情などは言わないよ」といって吉次を承諾させた。

奥州は、昔、頼義、義家らが戦功を建てた土地で、その上、豪族の藤原氏は、後三年の役の後に、義家のお蔭で陸奥の押領使となった清衡の後ですから、人も土地も源氏とは縁故が深いのです。 牛若は遥かにそこに下って行って、この藤原氏の力を借りて、源氏再興の望みを果たそうと考えたのでした。

おうしゅう くだ  
奥州へ下る

さて高倉天皇の承安4年3月3日、牛若は吉次と一緒に京都を立てて奥州に下った。 その途中、近

## 第14話 源氏の挙兵

江の鏡の宿で、彼は自ら元服して名を義経と改め、源九郎と称した。実は義朝の8番目の子であるから、八郎というべきだが、叔父の為朝が鎮西八郎為朝と名高いので、自分は更に一郎を加えて九郎と称したのだということである。奥州に入って、平泉の秀衡の館に着くと、秀衡は喜んでこれを迎えて、厚くもてなした。義経は秀衡から金30両を借りて、お礼として吉次に與えて、初めの約束を果たした。

### 再び都に上る

しかし、源氏再興の望みに就いては、秀衡はただ時節を待つようにといたきりで、はかばかしくその相談に乗ろうとはしなかった。それで、その年も暮れて、義経は17才の春を迎えると再び都に上り、陰陽氏の鬼一法眼に仕えて兵法の『六韜』を学ぶ傍ら、密かに平家の様子を窺っていた。五条の橋で、武蔵坊弁慶を服して家来にしたのはこの時として伝えられている。しかし、いつしか彼のことが六波羅に聞こえて、平家の詮索が厳しくなったので、義経は弁慶をつれて再び奥州に下り、秀衡の許に身を寄せていたのでした。

それから、今度、頼朝が東国で兵を挙げたと聞くと、義経は非常に喜んで、多年の希望を達するのはこの時と、取るものも取りあえず急いで馳せ上りました。従う者は20余騎にしか過ぎなかったが、その中には武蔵坊弁慶を始め、伊勢三郎義盛、佐藤継信、忠信の兄弟など、一騎当千の勇士が多かった。

### 頼朝と義経の対面

頼朝は義経が来たたと聞くと、涙を流して喜んで、直ぐに内に入れて対面した。思い返せば20年前、互いに敵の手に捕らわれて、危ない命だけは助かったとはいえ、東に西に引き離されて逢うことの出来なかった兄弟が、今、凶らずも互いに無事な顔を見ることが出来たのです。いかに感慨の深かったことであつたでしょう。殊に頼朝の身にとっては、今この大事を思い立った時に当って、親身の者の一人もいなかったところに思いもかけない真実の弟が現われて来たのですから、いかに心強く、いかに頼もしく思つたことでしょう。

昔、後三年の役の時に、源義家の苦戦の様子を都で聞いた弟の新羅三郎義光が、心配の余り、官を捨てて、わざわざ陸奥の陣中に兄を助けに下って行くと、義家は涙を流して喜んで、「今日、お前が来てくれたのは、亡くなられた父上が生き返っておいでになったような気がする」といったと伝えられるが、この時の頼朝の心も全くそれと同じであつたろう。彼は、「今日、お前を見るのは、亡き父上にお目にかかるのと同じである」といって涙を流したので、義経も涙を流し、その場に居並んだ将士も皆鎧の袖を濡らしたということであります。

### 範頼も来る

さて、頼朝は鎌倉に帰ると、今度の合戦に功のあつた者にはそれぞれ賞を与え、降参して出た者も大抵は赦したが、大庭三郎景親のような、先に彼を撃つて苦しめた大将株の者はこれを殺した。梶原景時も降参して来た。これは命の恩人であるから、梶原景時は直ちに聴して重く用いることにした。又、弟の範頼もこのころ鎌倉に下って来た。義朝の六番目の子で、幼少の時から京都の藤原範季の養子

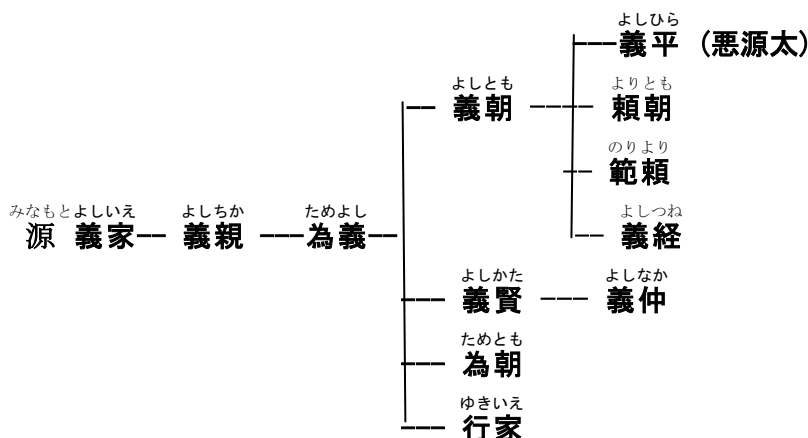


になっていたのですが、兄が兵を起こしたと聞いて、これを助けるために下ってきたのです。世に蒲冠者と呼ばれます。

鎌倉に幕府を開く準備

こうして頼朝の勢いはますます盛んになったが、上野、下野、常陸から奥州の方面にかけては、まだまだ油断のならない豪族が割拠していたので、彼はそれらを悉く自分の支配の下に置こうかと暫くはそれに心を注ぎながら、鎌倉に幕府を開く準備をしていた。彼は先づ八幡宮を由比ガ浜から今の鶴岡に遷して、その附近に自分の館を構えた。すると、部下の将士らもまた、競うてその邸宅をこの地に営み始めたので、商人や職工の類も次第に集まり、淋しかった相模の漁村は忽ち繁華な都会となりました。

こういう風に、頼朝が慎重な態度でその地盤を固めている時、先に一富士川の対陣の前月、即ち治承四年九月に - 同じく以仁王の令旨を奉じて兵を木曾の山中に起こした源義仲の勢いもまた大いに盛んになって、既に信濃の大部分を征服して上野に入っていた。



源義仲の生い立ち

義仲は義朝の弟の義賢の子で、頼朝の従弟です。幼名を駒王丸といった。近衛天皇の御代に、父の義賢が甥の悪源太義平のために武蔵の大蔵で討たれた時に、駒王丸は僅か2才でしたが、義平は生かして置いては後の為によくないからとて、駒王丸を尋ね出して必ず殺すようにと家来の畠山重能に命じたのでした。

重能はたしかに承ったとは言ったものの、どうして2才のあどけない子に刀を当てることが出来るようぞと、不憫に思っていると、ちょうど齊藤実盛が武蔵に下って来たので、これに預けて養わせることにした。実盛も、自分の手許で養うことは逆も出来そうになかったため、木曾の山中に住んでいる中原兼遠という、駒王丸の乳母の夫の許へ密かに送って、これを育てさせることにした。

義仲の挙兵

駒王丸は兼遠の養育のお蔭で成長して、漸く7,8才になった頃に、保元、平治の軍が続いて起こ

## 第14話 源氏の挙兵

って、源氏がことごと 悉く亡びたと聞くと、幼心おさなごころにも非常になげ 歎いて、いつかは平家を倒して、源氏の勢力せいりよくを恢復ふくしようと思ひ、それからはいよいよ武芸ぶげいを励んだ。年と共に体も普通の人よりも大きくなり、腕力わんりよくも強く、殊ことに馬に乗って弓を射ることは人にすぐれて上手いそんでして、飛ぶ鳥や走る獣なども決して射損いそんじるようなことがなかった。

13才の時に元服げんぷくして、名を義仲よしなかと改め、その後は京都へも度々たびたび忍んで上しのって平家の様子ようすを窺うかがったが、これという機会よしなかもなくしていたところに以仁王の令旨よしなかを受けたのでした。それで義仲は大いに喜び、今は何の憚はばかる所ところがあるかと、早速兵さつそくを集めて、信濃かの大部分したがを駆り従うえると、その勢いに乗じて、父義賢よしきたの縁故こうづけの地である上野うの国したが(群馬県)に入って、その地の武士の多くを打ち従うえたのです。この時、彼は27才でした。

### 清盛の焦燥

さて、清盛は福原の都でこれらの知らせを聞いて、しきりに怒りたけっていました。わざわざ50,000の兵を率いて富士川まで下って行った維盛これもりらが、一戦にも及ばずして逃げ帰った時には、維盛これもりを鬼界ヶ島へ流せとまで言って怒ったが、そういううちにも、令旨を奉じて諸国の源氏が起った知らせは続いて来た。殊ことに京都に近い近江や美濃に起こった源氏は、三井寺きみやくと気脈つうを通じて京都に迫ろうとしていると注進せまされた。今ははいよいよ捨すてて置けなかった。

しかしそれにしては、都を福原においたままでは不便ふべんな事が多かった。それに、今度の遷都せんとは、清盛が恐ろしさに誰も口にこそ出しはしなかったが、公卿や殿上人を始めとして、一人として喜んでいる者は無かったし、諸大寺のうちで唯一の身方である延暦寺からも、既に度々元の都かえに還るよという願ねがいがだされていた。

### 遷都の中止

又、高倉上皇は、福原にお遷りになった頃から、次第おもに病気が重くなり、せめてもう一度、命のあるうちに住みなれた都にお還りになりたい御心がしきりであったし、それやこれやの事情からも、今は1日も都を福原に置くべきではないようになっていた。さすがに強情ごうじょうな清盛もこれを悟ると、皇居さどが出来上がってまだ半年も経たない11月23日に、俄にわかに遷都せんとの中止ちゅうしを発表して、天皇、上皇、法皇を奉じて京都かえに還って来た。

### 清盛、諸大寺を焼く

清盛は京都に帰ると、先づ第一に、子の知盛とももり、弟の忠度ただのりらをやって、三井寺やを焼き払はらわせたが、更に12月の末には子の重衡ちゆうかうを大将として、30,000騎を率いて奈良の幸福、東大の2寺を攻めてこれを焼き払はらわせた。実に、傲慢ごうまんな清盛あに逢あっては神も仏もなかったのです。

この時、火は烈風れつふうに吹き煽ふられて、忽あおち炎々たちまと燃え広がり、一字の堂えんをも、1巻の経をも残さなかつたばかりでなく、東大寺の大仏の首は焼け落ち、その体は溶け合うって山のようになったと言われる。焼死やけした者が3,500人、戦って討たれた僧兵が1,000余人というのを見ても、いかにこの焼き討ちが猛烈もうれつで、

ものすご  
物凄くむごたらしいものであったかが分かります。

しかし、なぜまた清盛は斯ういう残虐な事をしたのでしょうか？

先に以仁王を奉じて頼政が兵を挙げた時に、奈良や三井寺の僧兵らが身方となったことは前に述べたが、その時以来、彼等は、何かといえは平家に反抗して、その命令に従おうとしなかったからです。清盛は大いに彼らを討ち懲らして、それに依って自分の威勢を天下に示そうとしたのです。

#### たかくら ほうぎよ 高倉上皇の崩御

ところが清盛一人は、やっとこれで久しい鬱憤が晴れたとあって喜んだが、この乱暴な焼き討ちは却って天下の憎むところとなった。殊に高倉上皇には「たとえ悪僧をこそ亡ぼすとも、多くの伽藍を滅ぼすという法はない」といってお歎きになったが、このお歎きのために、さらでだに重くなられている病気がいよいよ重くなられて、ついに翌5年の1月14日にお崩れになった。御年は21才でした。

上皇はご幼少の時からご賢明の聞こえが高く、ご臣下を憐れむお話なども数多く伝えられている。その一つ二つを茲にあげて見る。

#### じょうこう けんめい 上皇のご賢明

—— まだご在位の時の事ですが、お年10才ばかりのころ、大そう大事にされていた紅葉の木を、ある朝、仕丁という、御殿の掃除などをする者共が、酒をあたためるためにと、折って薪としてしまったのをお聞きになって、さぞお怒りになるであろうと近侍の役人が恐縮して打ち案じると、天皇には却って、快げに打ち笑われ、さりとはまた風流な者共である、林間に酒をあたためて紅葉を焼く、という白楽天の詩の意をば、誰が彼等に教えたのであろう、と仰せられて、少しもお咎めにならなかったということです。

又、それより4,5年の後の12月、御方違え（註：昔、陰陽師というトを掌った者が言ったことで、天一神のいる方を忌んで、それを避ける為に他の方角へ出て行くこと）の行幸をなされた時に、やや夜が更けてから、どこか遠くのほうで人の叫ぶ声がしたのを、お供の人々は誰れ一人として聞きつけなかったのに、天皇はお聞きになって、「只今叫ぶは何者か、急いで、みてまいれ」と仰せられた。宿直していた殿上人が、当番の武士に命じて尋ねさせると、院の御所に仕えているある女官の召使いの少女が、やっと仕立てあがった主の女官の正月の衣装をとどけるために持って行く途中、ある辻で2,3人の男に出会って、奪われてしまったのです。

「御装束があればこそ、御所にもおつとめが出来ましようが、急に代わりといったところで、どこに御相談なさるところもないのを思うと、悲しくて、悲しくて・・・」とさめざめと泣いているのをいっしょに連れて帰った。この由を奏上すると、天皇にもこの上もなく可哀想におぼしめされて、その衣装と同じ色のご衣装を皇后の宮の御所より取り寄せになり、それを代わりにと賜った上に、まだ夜は深いし、又もや同じ目に遭ってはいけないからと、その少女に幾人かの武士をつけて、主の女官の局まで送らせたこともありました。

## 第14話 源氏の挙兵

### 法皇のご落胆

高倉上皇は、清盛の傲慢とわが儘とは絶えず御心を悩まされたが、お年の若かったためもあって、これを抑えることがお出来なかったのを常に天下のためにお歎きになっていた。又、法皇におかれても、この君に院政をお任せになるようになれば、世の中は延喜天曆の昔にも立ち返って、よく治まるであろうと思っておられたのに、先にお崩れになってしまったので、非常に力を落とされて、ご自分の運が尽きたとばかりでなく、国のため、民のためにもこの上はない損失である、と仰せられてお歎きになったということです。

実に清盛の無道は、高倉上皇のご寿命をも縮めたのであります。

( 第14話 源氏の挙兵 終わり。 次は前頁に戻り、 第15話 平氏の衰運 へ)